慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	トーマス・マンの文化概念について：「戦時の断想」を中心に
Sub Title	Über Thomas Manns Kulturbegriff : Über ein Essay des Kriegsjahres 1914
Author	坂口, 尚史(Sakaguchi, Naofumi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.47 (2011.) ,p.135- 150
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小林邦夫教授 退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kunio KOBAYASHI
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20110331-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トーマス・マンの文化概念について
――「戦時の断想」を中心に――

坂　口　尚　史

はじめに

ドイツの文化について，トーマス・マン（1975–1955）がどのように考えたか，この大きな問題について，今回は第一次世界大戦が始まった1914年11月にDie Deutsche Rundschauに発表されたEssay「戦時の断想」（Gedanken im Kriege）を中心にその文化概念（Kulturbegriff）について考察したいと思う。マンは，小説，評論，書簡，日記なかで，実に多くドイツ文化について語っている。次にくる最大の評論『非政治的人間の考察』（1915–1919）は，生涯の前半の総決算であり，徹底して自己の精神のあり方を再検討したものである。それはドイツ帝国を擁護する，保守的な，反民主主義的な立場から出た考えではあったが，小説『魔の山』執筆を中断してまで書かれたこの評論の執筆中に自己批判が生まれ，antidemokratischな考えは修正されていった。大戦中に生じた兄弟間の不和は，1922年にトーマスのエッセイ「ドイツ共和国について」が出たあたりにおさまって，兄弟の和解が成立した。トーマスは民主主義を承認し，それ以後においては，「文化」と「文明」の対立は，「戦時の断想」のときほど鮮明でなくなり，『考察』のなかで兄ハインリヒを想定して用いられた言葉「文明の文士」（Zivilisationsliterat）に彼自身がなっていったとみることができよう。

しかし，この過程は複雑であり，トーマスの思考は兄ハインリヒのように首尾一貫していない。生涯の各時期の中でもまとめ方が困難な時期であるということができる。ワイマール共和国の後半において，ヒトラーのナチス党が台頭してきてからは，和解した兄弟が協力してナチズムと対決したことは明白である。そこに達するまでの最初の段階として，第一次世界大戦の勃発と，「戦時の断想」について述べる。

1.「戦時の断想」にみられる，ドイツ文化のあり方

1914 年 7 月オーストリアの皇太子がサラエヴォで狙撃されたことにより，第一次世界大戦が始まったとき，ドイツ，オーストリアの大多数の知識人，芸術家たちはこの戦争を歓迎し，ドイツ帝国を擁護する保守的な戦争肯定の立場にいたことはよく知られている。ムジール，ハウプトマン，リルケ，デーメルなどの詩人，作家たちとともにトーマス・マンもこのグループの中にいて，1914 年 8 月から 9 月にかけて「戦時の断想」と題するエッセイを「新ドイツ展望」誌に発表した。その中でマンは，敵である西ヨーロッパの掲げる「文明」（Zivilisation）のイデーとそれが内包する民主主義化と政治化に対抗して，ドイツの「文化」（Kultur）を守るための戦争が今度の戦争であることを主張した。この主張がさらに拡大されて，西洋の文明と民主主義に対抗するドイツ文化の内面性を重視し芸術と生のドイツロマン主義的な理解を示す，非政治的芸術家の大規模な論争の書である『非政治的人間の考察』へと発展するのであるが，いまそれはさておき，この「戦時の断想」が兄ハインリヒをたいへん驚かせ，1922 年まで兄弟が絶交の状態になったことに注目したい。

このとき兄弟はお互いに相手の考え方をよく理解していなかった。ペーター・ド・メンデルスソーンは，その著『魔術師―ドイツの作家トーマス・マンの生涯―第 I 部』において，トーマスはドイツ帝国が勝利して，勝ったドイツ帝国のなかでハインリヒの名声があがるだろうと考えていたと推測している。しかし，兄は弟とはまったく異なる考え方をしていた。

「敗れたドイツ帝国においてのみ，すなわちドイツ共和国においてのみ，何か意味あることが生じる」と[1]。兄は一貫して平和論者であり，ヴィルヘルム・ヘルツォーク，クルト・ヒラー，ルネ・シッケレらとともに，ドイツ共和国をのぞむ少数派に入っていた。「戦時の断想」は，フランスの平和主義者ロマン・ロランに批判され，さらに兄が「ゾラ論」（1915）で弟を攻撃した。このことに今度はトーマスの方が衝撃を受け，『考察』執筆の大きなきっかけとなった。

このエッセイは，あまりにも時流に染まりすぎたものであったため，大戦開始時の知識人の興奮が間もなく終息に向かってから，マンはこのエッセイを自らの評論集に収録しなかった。マンの死後 13 年の 1968 年に出版された，20 巻本のペーパーバックサイズの全集に，1960 年版全集の再版の補完として 1974 年に出た第 13 巻 Nachträge にようやく収録された。今回はそれらとともに二種類の注釈付きのテキストを使用することができた。一つは，1993 年から 6 巻本で刊行されたエッセイの選集である。編集者のヘルマン・クルツケとシュテファン・シュタホルスキーが述べているように，約 6,000 ページにのぼる膨大なエッセイのうちから 2,000 ページが選択され，難解な語句に注がつけられている。そこには『考察』は含まれていない。もうひとつは，2002 年に同じ編集者によって刊行された Große kommentierte Frankfurter Ausgabe の Essays Ⅱ（1914–1926）である。2009 年には，Betrachtungen eines Unpolitischen が，やはりクルツケとシュタホルスキーによってついに刊行された。マンが引用した出典の訂正も含まれており，今後エッセイ研究になくてはならない版となるであろう。

「戦時の断想」が発表されてしばらくたった 1914 年 12 月号の Forum 誌にヴィルヘルム・ヘルツォークは，このエッセイを批判して次のような感想を述べた。

> これまで自制を信条とし，その彫琢された文章がいつも人の心を惹きつける力をもっていたトーマス・マンのような詩人が，いかなる理由のために，さらに言うならば，ブッデンブロークの詩人がいかなる理由のために「戦時の断想」を発表しなければならなかったのか？　平和だった時に，彼はすくなくともこのような考えを控えていたのに[2)]。

大戦勃発時のマンの態度は，彼の伝記においても大きな謎のひとつに数えられるという。その謎の解明をしなければならない。ヘッセは平和主義者であり，戦争には意味がないと思ったが，トーマス・マンはそのようには考えなかった。マンは冒頭で，「文化」と「文明」という標語が新聞などにおいて不正確であり，しばしば同意語であるかのように扱われていることをあげ，この二語は同じ概念なのではなく，相対立する概念であることを強調する。その具体的な例として次のような説明がなされる。

> メキシコが発見されたとき，メキシコが文化を持っていたことは誰も否定しないであろうが，メキシコが文明化されていたとは誰も主張しないであろう。文化は，はっきり言って野蛮の反対なのではない。文化はむしろ様式をそなえた野生であって，古代のあらゆる民族のなかで文明化されていたのはおそらく中国人だけだった[3)]。

フランスやイギリスは文明化された国であり，それら西側の三国協商の国にたいして文化の国ドイツ，オーストリアが戦っているという想定があり，文化の定義がなされる。文化は，「閉鎖性，様式，形式，姿勢，趣味」であり，「野性的で，血生臭く，おそろしいもの」である。これに対し文明は，「理性，啓蒙，緩和，道徳，懐疑，解消――つまり精神である」とされる。文化の恐ろしい一面を示すものとして，マンは次のような12にのぼる項目をあげているが，その中には中世ドイツ，古代ギリシャ

のディオニュソス崇拝からメキシコ原住民の軍神まで含まれている。すなわち「神託，魔術，少年愛（Päderastie），メキシコ原住民の軍神（Vitzliputzli），人身御供，オルギア風の崇拝形式，アウトダフェ（異端者処刑，焚書），舞踏病，魔女裁判，毒殺の栄え，さまざまな恐怖」というこれらの項目が文化には含まれる可能性があると述べている[4)]。一部は，『ファウスト博士』の主人公の故郷の描写に用いられた言葉を想起させるものであり，近代以前の野蛮ともいえる項目が入っている。シラーがかつて述べたように，ドイツの偉大さは政治や経済にあるのではなく，「ドイツの文化」にあるとする伝統的な考え方があり，それに加えてワーグナーやニーチェからもマンは文化のあり方について大きなヒントを得ていた。ニーチェの「音楽の精神からの悲劇の誕生」における，アポロ的なものとディオニュソス的なものとの二重性が文化を推進する力であるとする考え方がその代表例であるといえよう。最後の節で述べるように，Kultur contra Zivilisation のテーマは，ニーチェの遺稿集のなかにみつけることができる。

マンは，「文化」を「文明」から切り離して考えていこうとしている。「文明」は，倫理的な尺度をもち，理性の価値基準で人間の幸福を築こうとしているのであるが，「文化」はそういったものでは測りがたいとされ，そこからマンの視点は芸術創作の非理性的な性質に向けられる。

> 芸術は，すべての文化と同様に，ディオニュソス的なものの純化である。その規律は道徳よりも厳格であり，その知識は啓蒙主義よりも深い，……[5)]

というくだりなどは，ニーチェ的である。そのすこしあとに，次のように続けられる。

> 芸術は，進歩や啓蒙や社会契約の楽しい気分，要するに人間の文明化

に内心関心をもつことからは隔たっているのだ。芸術の人間性とは徹底して非政治的なものである。芸術の成長は国家や社会の形から独立したものだ。狂信主義や迷信は，それらが芸術の成長を促進しなくても，芸術の成長をそこなうものではない。そしてたしかなことは，芸術が情熱とともにあるということなのだ[6)]。

そしてマンの巧妙な語り方は，芸術の創作過程を戦争の成り行きと置き換え，芸術家の制作は戦う兵士と同一視される。全体を「組織化」し，素材の頑固な抵抗と戦っている芸術家は，軍隊を運営し，周到にそして勇敢に戦う兵士であり，「市民的な安全という概念の軽視」や「自分自身に対する仮借なき態度」という点でも両者は共通するという。「実際すべてが，軍隊的（militärisch）であると同時に芸術家的（künstlerisch）である」というこの一文をとってみても，読者とくに兄ハインリヒのような戦争反対派の人々は，唖然とさせられたにちがいない。なぜ戦争がこのように感動的なものとなったのであろうか。大戦前のトーマスの状況を示す文として，『ヴェニスに死す』（1912）の初老の芸術家グスタフ・アッシェンバッハに関して，彼が「兵士であり軍人」であると書かれていたことが想起される。第 5 章の，彼が少年の魅力にとらわれていく過程で次のような説明がある。

彼も祖先の多くの人びとと同じように勤務の生活をしてきたのであって，兵士であり軍人であったのだ。――それというのも，芸術は一種の戦争，今日ではだれも長くはやってゆけない，精根の尽きるような戦闘だからである[7)]。

この部分は，「戦時の断想」の文章と内容において一致している。しかし，トーマス・マンその人は，実際に戦場にでたわけではない。戦争が始まったことに芸術家が感激しているということは，戦争の勃発が彼の芸術

家としての問題とかかわっていることを示している。39 歳の芸術家は，創作の面で行き詰った閉塞の状態にあったことがわかる。そして，平和な世界に飽き足らないものを感じていたことをはっきりと告白している。その世界は「（文明の）精神の化け物」にあふれており，「文明の破壊的な要素によって発酵し，臭いを放っていた。」クルツケは，これらの表現に大戦前の文学に支配的であった，デカダンスの過剰な内省的傾向を見ている。それらの文学は，健康，民衆性，素朴，信仰を知らない，批評や分析ばかりしている傾向である。もっとしっかりとした「道徳の再興」（ein moralisches Wieder-fest-Werden）が求められていた。それはアッシェンバッハの目標であり，ここでもマンは，彼の立場で語っている。『ヴェニスに死す』の第 2 章を見てみよう。

> この物語（『みじめな男』と題された小説）において，放埒なもの（das Verworfene）を否認している言葉の重みは，いっさいの道徳的懐疑癖からの離反，深淵に対するいっさいの共感からの離反，すべてを理解するとはすべてを許すことだという同情の原則のだらしなさとの絶縁を予告した。……[8)]

「放埒なものを否認」したのは，当時デカダンスの文学を批判したもろもろの立場の人たちであった。アッシェンバッハは，「最も深い認識の彼岸における倫理的決断の可能性を示してすべての青年に感謝された」小説『みじめな男』の作者であったが，同時に「精神と芸術」についての情熱的な論文の作者でもあった。この論文のタイトルは，実はマンが 1909 年頃，書きためていた創作ノート Geist und Kunst と同名であり，シラーの『素朴文学と情感の文学』をヒントにしたものであったが，完成はしていない。しかし，そのうちのいくつかが「戦時の断想」のなかに，ほとんどそのまま取り入れられている。

第一次大戦前の平和な状況のなかで，多くの詩人たちは戦争を望んでい

たわけではなかったし，ヨーロッパの破局を認識してもいなかったが，心の奥底ではこの状況は続いていかないだろうと感じていた。そこへ突然に開戦の知らせがきたのである。可能とは思っていなかったことが急におこった。詩人たちは競い合って，戦争をたたえる詩や文を発表した。詩人たちを感激させたのは戦争それ自体であり，マンの表現を借りれば，「神の試練」（Heimsuchung）であった。Krieg! Es war Reinigung, Befreiung, was wir empfanden, und eine ungeheuere Hoffnung. とマンは叫んでいる[9)]。

「戦時の断想」の中間部では，文明の国と戦っている，「文化」をもつドイツ民族の特質が語られる。それは，内面性の民族，形而上学の，教育学の，音楽の民族であり，政治よりも道徳志向を示している。ドイツを特徴づける Moraritäｔという言葉は見逃せないキイワードとなっている。ドイツは，民主主義，議会政治の形態または共和主義へ向かって政治的に進んでいくことに，他国民ほどの大きい関心をもたない。ドイツは文明化されない国なのである。ヨーロッパを敵にまわして戦うドイツは，18 世紀のフリードリヒ大王にたとえられる。あのときと現在の第一次大戦の状況が同じであるという。七年戦争において，ヨーロッパは彼を排除することは不可能であることを知った。大王にはかれが大いに賞賛すると同時に軽蔑した一人の友人がいた。ヴォルテールである。フランスを代表する思想家であり，マンの文化論では敵方の論客である。

> ヴォルテールは，作家であり大市民であり，（フランス）精神の息子，啓蒙主義とすべての反英雄的な文明の父であった。彼が戦争について書いたことは，国王を疑いなくことのほか楽しませ，弁証法的に魅了した[10)]。

「反英雄的」なのがヴォルテールであるなら，「英雄的」なのはフリードリヒということになる。両者の対立は，「理性とデーモン」，「精神と天才」，「市民的な礼節と英雄的な義務」，「偉大な文民と偉大な兵士」の対立であ

るとマンは強調している。ヴォルテールに対抗してマンは，ドイツのモラリストの代表としてニーチェを呼び出す。この哲学者は戦闘的，軍事的な傾向をもち，道徳性を有する戦闘性をもっているドイツ魂の後ろ盾としてふさわしい。戦争の道徳的な弁明のためにニーチェをもちだしてくるなどというのは，兄ハインリヒにとって許しがたいことであったろう。ハインリヒも若い時ニーチェの大きな影響を受けたが，ニーチェの影響を克服して，ヴォルテールの精神にひかれていったのであるから。ハインリヒの，「ヴォルテール—ゲーテ」［1910］には，啓蒙主義を高く評価する傾向がみられるからである。

ニーチェにつづいて，トーマス・マンは，シラーの晩年のドラマ「メッシーナの花嫁」第 1 幕のなかに次のような台詞を見つけて，書き記した。合唱隊の一人の言葉である。

なぜなれば人間は平和の中では萎縮するものだ。
安閑たる休息は勇気の墓場であり，
法律というものは弱者の友であって，
あらゆるものをただ平等にし，
世の中を平板なものにする。
だが戦争は力を顕揚し，
一切のものを非凡なものにまで高め
臆病者にすら勇気を生ぜしめるからだ[11]。　（相良守峯訳）

引用の巧みさには，本当に感心させられるが，これを読んだロマン・ロランの反感をかうことになった。『非政治的人間の考察』のなかで，それに対する反論が展開される。

2.「第三の国」について

大戦中マンは，ドイツの戦争に精神的な意味づけを与えるために，『考

察』をはじめとして複数の論文を発表し，努力を払っていた。スウェーデンのストックホルムにある「スヴェンスカ・ダグブラーデット」紙の編集部が求めてきたアンケートに答えて，1915 年に執筆した文章もそのひとつであり，たいへん興味深いことが書かれている。ドイツは，かならずしも戦争を望んでいたわけではないことを断ったうえで，どうして戦争を歓迎し，戦争勃発時に賛意を公言したのかを述べているのである。それによると，ドイツは「第三の国」を求めたからだという。Das Dritte Reich とは何か？　当時の論壇や文学の中にこの用語は現れていた。この言葉には二種類の意味があり，一つは政治的な意味である。「保守的な革命」をめざす，大戦中からの政治論に現れていた。それらは，ヒトラーの NS-Staat とはまだ距離があり，ただちに「第三帝国」に結びつくものではなかった。他の一つは，トーマス・マンらドイツの知識人が考えたドイツ文化のありかたである。ストックホルムの新聞に寄せた論文によれば，「それは，権力と精神の総合である」という[12)]。それは，ドイツの夢と要求であり，最高の戦争目的であった。諸民族を攻撃して制圧することが目的ではなく，ドイツには反動派がいて，彼らは第一帝国，すなわち精神の帝国の臣下だ。ほかに保守派もいて，彼らは第二帝国，すなわち国家権力の無条件の支持者だ。そして未来のドイツを希求する人がいて，die Synthese von Macht und Geist がその夢だという。この場合の「精神」は，文明のそれではなく，ドイツの文化を示しているのである。文化の国の実現のためにドイツは戦っているのだという主張である。筆者はうかつにも，「第三の国」という文化概念は，ワイマル共和国が成立し，マンがそれを承認して以後の文化概念であると思っていたのであるが，1915 年のこの論文においてすでに出ていたことを，クルツケの注釈によって知ることができた。さらに 1912 年の「フィオレンツァについて」の最後でも，次のように述べられている。

　　というのは，詩人は総合（die Synthese）そのものなのです。詩人は

いつもどこでも総合を表現します。すなわち，精神と芸術，認識と創造性，知性重視と無知，理性と魔力（Dämonie），禁欲主義と美，―第三の国を[13]。

ワイマル共和国成立以後に書かれた論文，エッセイの中では，10 個所ほど「第三の国」が登場する。そのなかでも特に美しい表現となっているのが，1921 年の「ロシア文学アンソロジー」であろう。そこで，イプセンの宗教哲学的なドラマのなかで，「第三の国」のことが語られるのをきき，感銘を受けたことを告白している。そのドラマとは，イプセンが 1873 年に発表した『皇帝とガリラヤ人』であった。皇帝は，ローマ帝政の末期に背教者とよばれ，キリスト教信仰に対抗してギリシャの多神教を復活し，霊の信仰を肉の礼拝に，禁欲の教えを美の解放に変えようとした皇帝ユリアヌスであり，ガリラヤ人はキリストであった。イプセンは，霊でも肉でもない「第三の国」のできあがる姿を将来に幻視しながらこの長い文化史劇を書いたのである。劇中の神秘主義者マキシモスは，第三の国のことを「偉大なる秘密の国，認識の木と十字架の木の両方の上に建設されなければならない国であり，その理由はその国が両方を愛しかつ憎んでいるからである。」と言っている。マンは次のように解説している。

この第三の国の総合的な理念は，すでに数十年このかた世界の地平に昇っており，人間たちの住む貧しい国々の上にあまねくその輝きを投げかけているのである。その総合とは啓蒙と信仰との，自由と制約との，精神と肉体との，「神」と「世界」との総合である。芸術的に表現すればそれは感覚性と批評性との総合であり，政治的に表現すれば保守主義と革命との総合である。…….あの「国」を求める戦い，新しい人間性と新しい宗教，精神の肉体化と肉体の精神化を求める戦いが，ロシア人の魂の中でほど大胆にまた熱烈に行われたところはどこにもないように思われる[14]。（片山良典訳）

「第三の国」を求める目的が，大戦中は戦争に勝つことにおかれていたことは注目に価する。大戦後はその目的はかわり，より高い人文主義的な内容となっていく。ロシア文学の崇高さの解説に用いられてから，1923年の「ドイツ共和国の精神と本質」と題された感動的な文章の中に現れる。この文は1922年に暗殺されたワルター・ラーテナウの追悼記念講演である。それによると，ドイツの市民は，文化概念（Kulturbegriff）または人文主義の概念（Humanitätsbegriff）を早期に決定しすぎたと言っている。そのために自由思想と民主主義的な考えを締め出してしまった。望ましい認識は，「共和国の基本的な思想となるべき，かの国家と文化の統一こそが，ドイツによってのみならず，すべての民族によって人間の可能性のかぎりにいたるまで求められ，目標とされなければならないのだ。ヨーロッパが失われ，荒廃するべきでないならば」というのである。この認識は数年前とは異なっている。

第一次大戦が始まったときに，トーマス・マンは自分がドイツ文化の弁護人にならなければならないと感じていた。文化と文明の対立を数年前から考えていたからである。戦争の感激がおさまってから，「戦時の断想」は「非政治的人間の考察」へと受けつがれていった。民主主義化された文明と同一視した政治に反対し，非政治的な立場を守っていた。しかし，大戦終結後ワイマル共和国が成立して4年ほどの間にその立場を改めたのである。それまでには，8年の歳月が必要であった。

3. 創作ノート「精神と芸術」

小論では，それまでの過程をたどることができないが，それは次の課題にすることとし，最後に「戦時の断想」を生んだ1909年の創作ノート（覚え書き Notizen）の文章をみておきたい。それは，実現しなかった「文学エッセイ」のための覚え書き「精神と芸術」（Geist und Kunst）である。Hans Wysling は，それら152の文章を整理して，1967年 Thomas-Mann-

Studien Erster Band のなかで，明らかにした。そのなかの文化に関する問題が，1914 年になって，時代に結びついて再び出てきたと見ることができる。マンはそのとき，時代と自分が深く結ばれていることを感じて感激していた。

文化に対する考え方に大きな影響を与えているのは，ワーグナーとニーチェの著作である。二人とも音楽の精神から，新しい文化のユートピアをめざしていたといえよう。力強い文化の創造に欠けている 19 世紀後半の状況に対する批判があったことはいうまでもない。ニーチェの 1880 年代の遺稿の中に，Kultur contra Zivilisation と題する，ノートがある。これは，マンのテーマに直接つながっている。

> 文化と文明の最高点は，離れ離れにある。文化と文明の超えがたい対立に惑わされてはいけない。文化が生まれる大きな要因は，道徳の面からいえば，腐敗と堕落の時代であった。背景の時代はいつも強いられた，人間飼いならし（「文明」）の時代であり，精神的に大胆な性質の人間を許さない，不寛容の時代であった。文明は，文化が欲するのとは別のものを欲する。おそらくは逆のものを…[15)]

マンの文化概念と共通のものがあることは明白である。

「精神と芸術」はマンの文化理論の出発点になっており，のちに「非政治的人間の考察」にも引用され，文化についての論点の萌芽を示している。文化と文明を論じているなかで，文化の野蛮への親近性がみられるのは興味深い。覚書 Nr. 118 を見てみよう。

> 精神はたしかに文化と連帯し，ひとつになっている。文化が自然の反対である限りそうなのである。しかし，これはあるひとつの意味において文化なのであって，ここで文化と「文明」の概念について理解することが大切なのである。メキシコが発見されたとき，メキシコが文

化を持っていたことは誰も否定しないであろうが，メキシコが文明化されていたとは誰も主張しないであろう。文化は，はっきり言って野蛮の反対なのではない。……[16)]

後半は先に引用した「戦時の断想」と同じである。それにつづく文化の定義も同じ文である。この覚書は，1909 年 12 月 25 日の《Der Tag》紙に，次のような書き足しの部分をつけて掲載されていた。

たとえ賢明な芸術家が，教訓にみちた，説得力のある考察を加えなかったとしても，芸術がどちらに属しているということ，すなわち文化のことがらなのか，文明のことがらなのかということは疑うべきではない。ジョルジュ・ビゼーはある書簡の中で，理性，文明，精神的な進歩は芸術を破滅させると言っている。進歩は芸術を殺すこと，迷信の多い社会の方が芸術にふさわしいと確信している。彼は理性，真理，正確さの芸術を信用していない。……芸術は理性が進んでいくほど衰退していくのだ[17)]。

フランスの作曲家 Bizet の証言は，マンによって発見された。ビゼーは文明の進歩を批判する側に立っている。（文明の）精神は，市民的なものであり，芸術創造の敵である。芸術の非理性的な面が強調されている。そこで言われている，非合理的，反道徳的な芸術のあり方はマンの文化についての考え方にヒントを与えた。このような文化観はしかし，フランスにはなく，やはり 19 世紀ドイツのものである。ニーチェの次のような個所はどうであろうか。『人間的な，あまりに人間的な』（Ⅰ）の第 8 章「国家への一瞥」の 477 において，「文化は決して情熱・罪悪・悪意を欠くことはできないのである」といい，「帝政時代のローマ人が多少戦争に倦んだとき，彼らは野獣を人間たちにけしかけたり，闘士に試合をさせたり，キリスト教徒迫害などから新しい力を得ようと試みた。」と書いている。

この節の冒頭の文が，「戦争は不可欠であること」となっているのも注目される。「文化は，はっきりいって野蛮の反対なのではない」という考察のきっかけとなったのではないだろうか。

覚書 Nr. 67 には，19 世紀の歴史家カール・ランプレヒト［1856–1890］の著作から文明と文化についての定義づけが引用されている。それによると，文明は文化とは間接的にしかかかわりがなく，特別に高い文化を感じさせなくても成立できる。文明は，外的な技術的な手段，われわれの時代においては何よりも科学技術の手段（エネルギーの集積，エネルギーの変成など）によって征服された人間の Physis（自然本来の力）を含めて自然を支配している。これに対して，文化は違っており，文化はもっと高いものをめざしている。特別に精神的な世界の主張を，宗教，芸術，学問において示しているのが文化なのである。

マンは，自らの使命を著作家と考え，「よい文学的な形式が，あらゆる個人的国民的な文化の自然な，必然的な表現である」とメモしている。行動的な偉大さはいつも「文学」と結びついていたことを強調し，歴史上の偉大な人物の名を記した。アレクサンダー，シーザー，ナポレオン，フリードリヒ，ルター，ビスマルク，ラサール，モルトケがあがっている。飛行船を開発して，当時国民的英雄とされたツェッペリン伯の業績は，それが典型的に文明的な業績であるため，取らないと明記されている[18)]。

文化と文明の対立，そして野蛮の反対ではない文化という思考は，大戦の勃発（それは予想されたものではなかった）とともに現実のものとなった。それらは，すでに覚書の中で書いていたことであった。そして『非政治的人間の考察』における，文明に対する執拗な戦いに入っていくのである。

注）

1） Peter de Mendelssohn： Der Zauberer, Das Leben des deutschen Schiriftstellers Thomas Mann, Erster Teil 1875 bis 1918, Frankfurt am Main

1975, 1996, S.1601

2） Hermann Kurzke： Thomas Mann, Eroche-Werk-Wirkung, 3. Auflage, München 1997, S. 137

3） Thomas Mann： Gedanken im Krieg, In： Thomas Mann Essays II 1914–1926 (Große kommentierte Frankfurter Ausgabe) Frankfurt am Main, 2002, S. 27

4） Ebd., S. 27

5） Ebd., S. 28

6） Ebd., S. 29

7） Thomas Mann： Der Tod in Venedig, In： Gesammelte Werke Band VIII, Frankfurt am Main, 1974, S. 504

8） Ebd., S. 455

9） Gedanken im Krieg, S. 32

10）Ebd., S. 35

11）Ebd., S. 39　シラー『メッシーナの花嫁』相良守峯訳　1952　岩波文庫　67–68 頁。

12）Thomas Mann： An die Redaktion des《Svenska Dagbladet》, Stockholm. In : Essays II, S. 129

13）Thomas Mann： Zu《Fiorenza》. In： Essays Band 1, 1893–1918, Herausgegeben von Hermann Kurzke und Stephan Stachorski, Frankfurt am Main, 1993, S. 151

14）Thomas Mann： Russische Anthologie. In： Gesammelte Werke Band X, Frankfurt am Main, 1974, S.598　トーマス・マン全集Ｘ　1972　新潮社「ロシア文学アンソロジー」231 頁。

15）Friedrich Nietzsche： Werke in sechs Bänden, Sechster Band, Herausgegeben von Karl Schlechta, München 1980, S. 837

16）Thomas Mann：《Geist und Kunst》. Thomas Manns Notizen zu einem《Literatur Essay》. Editiert und kommentiert von Hans Wysling. In : Thomas Mann-Studien Erster Band, Bern, 1967, S. 215

17）Ebd. S. 225, S.226

18）Ebd. S. 187